

2023
読書推進講演会

子どもと読書 ー今、大切なものー

講師 島 弘 氏 (公益社団法人日本図書館協会児童青少年委員会委員長)



2023年度読書推進講演会が、7月26日(土)13:30～15:30、日本図書館協会児童青少年委員会委員長の島弘氏をお迎えして開催されました。以下に要約を載せます。

【講師紹介】 元東京都福生市立図書館館長。現在、日本図書館協会児童青少年委員会委員長、日本大学文理学部、千葉大学で非常勤講師。著作『図書館と子どもたち』久山社ほか。

1. 子どもに本との出会いを

読書は、次の点で大切だ。①想像する力を育む。文字は記号だが、文字を言葉として捉え、言葉から物語をイメージし想像する。②言葉を知り、文章を理解し、考える力を育む。考えるとは、言葉を積み重ねること。③他の人の生き方、考え方を知る。自己を確立し、生き方のヒントになる。④社会を知る。歴史や社会の扉を開く。⑤感じる心を育む。言葉では説明できないことを感じる。行間を読む。

本が好きと答える中、高生は、読み聞かせをしてもらった経験者が多い。読み聞かせは、読み手と聞き手の信頼関係を作る。家庭での読み聞かせの時間が減っている傾向がみられる。幼稚園、学校、図書館、家庭などいろいろな場で読み聞かせの機会を作ることが大事。

2. 子どもとデジタルメディア

スマホの普及が進み、テレビ以外でも、子どもがデジタルメディアに触れる時間が増加した。アンデシュ・ハンセン著『スマホ脳』(新潮新書)によると、人間の脳は1万年変わっていない。身を守るため動くものに集中し、新しい変化に敏感。スマホはその脳の働きをうまくビジネスに生かしている。

内閣府「青少年のインターネット利用実態調査報告」で、2歳から17歳全年齢で動画を見る割合が高く、インターネットの利用時間(1日平均)は10歳で200分を超え、17歳で346分となった。

子どもの健康にはどのような影響があるのか。①ドライアイ、視力低下、内斜視など目への悪影響。②外遊びが減り、足首が固い、転倒時手が着けないなど体への影響。③五感の中で、視覚の刺激のみで、視覚以外の五感の刺激が弱まる脳への影響。

大切な基本は、睡眠、質の良い食事、体を動かす遊び、コミュニケーション。(内海博美「子どもの育ちとメディアの害 デジタル時代でも基本を忘れないで」『月刊クーヨン』2021年2月号より)

3. 子どもたちの読書から考える

「子どもと電子メディアを考えるプロジェクト」調査報告
児童図書館研究会調査

(1) 紙の本の特徴

①現物の表紙や判型などが選ぶ手がかりになる。

幼児は、床に絵本を並べ、どの本を読んでもらうか順番を考えたり、小学校低学年では、「大きい子の本」みたいだと、ページ数の多い本を選ぶなど。

②読書の量を確認することができる。

本を積み重ねて置けるので、何冊読んだか一目で分かり達成感を感じる。

③宝物になる。

気に入った本を他の本とは違う特別な場所に置くなど。

④人に薦めやすい。

厚い本に躊躇していたが、友だちの声掛けが借りる後押しになった。司書が手渡した本を読んでみたら、「好きな本だった」と感想を伝えてくれたなど。

⑤周りの人とコミュニケーションを取りやすい。

5歳のお兄ちゃんが自分もお向けになって、赤ちゃんに読み聞かせをしてあげた。「同じの、持ってる」と教え合ったりする。

⑥本の世界を、現実の世界と同等に受け止め、楽しむことができる。

絵本のおにぎりを食べようとする。がたんごとの言葉に合わせ体を揺らすなど。

⑦「本の」世界と「遊び」とを融合する。

絵本のない時に、絵本の中の台詞を言いながらごっこ遊びをするなど。

⑧記憶を呼び起こす助けになる。

幼い頃から図書館に通う20歳前後の男性に、子どもの頃読んで思い出に残っている本があるかと聞くと、『おばけのてんぷら』を開いて、「間違いない、この匂いだ」と言った。

⑨五感を刺激する。

「もの」としての本には、紙やインクの匂いがあり「嗅覚」が働く。読み聞かせの声は「聴覚」、絵に触れたりページをめくるのは「触覚」、子どもが口に入れることを前提に角を丸くした本もある。「味覚」には繋がらないが、それに近いものを感じる。文字や絵をみるのは「視覚」。



(2) 電子書籍(YouTubeなどのデジタルメディア含む)の特徴

①普段、居る所で手に入る。

Web漫画や青空文庫で近代文学を読んでいる。(高校生)

②紙の本に進む入り口になることがある。

コロナ禍でKindleを購入、漫画や角川つばさ文庫を読む。その後、紙の本も読むようになる。

- ③YouTubeやSNSのおすすめ本を読む。
小学校高学年、中学生でYouTuberから情報を得て本を選ぶ事例が多い。
- ④無料のコンテンツを読む事ができる。
スマホで無料で読める漫画、小説の投稿サイト、青空文庫を読む。
- ⑤読み方が変わる可能性がある。
タイトルの飛び方、選び方にスピード感がある。タブレットをタップしたりスワイプする操作をしながらの読書。
- ⑥読みの苦手な子どもに有効。
マルチメディアデジジーを利用。音声や画像情報の助けでお話を楽しめる。
- ⑦年齢が上がるごとに接触が増える。

▶まとめと

子どもたちが生き生きと紙の本と接する事例が多く見られた。乳幼児や小学校低学年では、「もの」としての特徴を持つ紙の本で読書の楽しさを五感を駆使しながら、たっぷり経験してもらい、その後、年齢とともにデジタルメディアへの接触を増やしていく。紙の本と電子書籍の選択については、子ども自身が内容や目的による使い分けを含めて、自分にとって良いと考えるメディアを選んでいくことが大切。

4. これからの子どもと読書

ICTが子どもたちの生活の中に溶け込んだ時代になった。小、中学校でのGIGAスクール構想の実現や公共図書館での電子書籍の導入など時代は大きく変わろうとしている。地域図書館と学校図書館の連携、行政機関とボランティアの協力など、あらゆる機会に読書の大切さを発信することが大切だ。

富士宮市立中央図書館の児童図書コーナーからの報告



◆ 夏休みの初め、児童書の棚の前で、男の子とお母さんが一緒に本を探していました。「どんな本をお探しですか」と声をかけたところ、読書感想文を書くための本

を借りにきたとのことでした。6年生と聞いて、探偵ものや冒険ものは好きか確かめてから、『名探偵カッレくん』と『地下の洞穴の冒険』を薦めました。どちらも主人公が等身大の少年で、同年齢の友だちがいて、身近なところで思わぬ事件が起きます。表紙にはドキドキワクワクする場面が描かれているので、その絵を見せながら登場人物や内容を少し紹介したところ、興味をひかれたようで2冊とも借りていきました。

同じようにお母さんと来ていた4年生の女の子には『オズの魔法使い』と『大どろぼうホッツェンプロッツ』を薦めました。物語のタイプは違いますが、どちらも魔女や魔法使いが出てきて想像力を刺激してくれます。2冊とも厚い本ですが、挿絵がたくさん入っているのをみせると安心したように借りていきました。

絵本コーナーのソファにまだ字の読めない男の子が絵本を広げていました。「読んであげようか」と聞くとうなずいたので、一緒に座って『ちろりんとうっけー』という絵本を読みました。とかげの兄弟が山道を歩いていくところを読んでいると、男の子が「あ、〇〇」と絵の中の小さい虫を見つけて教えてくれました。それからページをめくる度にふたりで虫を見つけては指さし、楽しみました。絵本を通して読み手と聞き手が気持ちを通い合わせることができたような気がします。

(市民読書サポーター・渡辺裕子)

◆ 小学2年生と3年生の兄弟が自分で読めそうな本を探しにお母さんと一緒に来ていたので、『エルマーのぼうけん』と『番ねずみのヤカちゃん』という本を紹介しました。内容を話すと、ふたりは息をつめて聞いていて、おもしろそうだから読んでみると言いました。お母さんに、「大人が読んであげるのもおすすめですよ」というと、お母さんも読んでやりたいといわれました。

おすすめの本のリスト『おもしろい本みつけた』を渡すと、お兄ちゃんがサッと取って中を開き始めました。すると、「これも知ってる、これも学校で読んでもらった」とたくさんの絵本を指さし、うれしそうにお母さんに教えていました。読み聞かせてもらった絵本をこんなに覚えていて楽しそうに話す男の子を見ていると私もうれしくなりました。

夏休みに、中学1年生の男の子が読書感想文用の本を探しに来たので、シートン動物記の『おおかみ王ロボ』を紹介しました。薄めの本で挿絵も多く、内容は中学生にも読み応えのある本です。内容を話すと「これなら読めそう、先が気になる」といって借りていきました。一緒にいたお母さんも、「大人が読んでもおもしろそう」といっていました。

またある時、1歳くらいの女の子が『おつきさま こんばんは』という絵本を両手に1冊ずつ持ってお母さんのところによちよち歩いていきました。これは6か月健診の時にブックスタートで富士宮市から配布される絵本です。女の子は家で何度も読んでもらった絵本が図書館にもあったので、母さんに教えようと思ったのでしょう。とてもほほえましい光景でした。(市民読書サポーター・渡辺みどり)

